



ササユリの優良個体

サマーセミナーで話を聞かれた方や、都合で参加できなかった方が、遠い所まで各地から次々に来場され、新しい品種に強い興味を示され、例年になく忙しい夏でした。これからは、期待されている責任を果たせるよう、完成に向けて頑張ろうと思っています。

手がけている品目について

ユリ

奈川に農場をつくったきっかけは、前述しましたように、当地に自生しているササユリをふやしてみたいと思ったことです。自生しているのは標高1,000～1,900mの高地で、6月末ごろに開花します。山草扱いにされているササユリに比べると、葉幅が広く、花径も大きく、大球になると一茎に7～8輪も花をつけるので見事です。正式な文献はありませんが、秋のうちに球根内で花芽が形成されること、また形態的に見ても、正にヒロハササユリと考えられます。野生種の中から優良個体を選抜し、増殖すれば、園芸的な価値も非常に大きいものになると考えて、手をつけることにしました。ササユリの増殖が難しいのは、耐暑性が非常に弱いこと、とくに地温の低いところでないとうちにくいことです。繁殖も木子がほとんどつかず、鱗片も薄いので、他のユリのような木子繁殖、鱗片繁殖ができません。実生は可能ですが、開花するまで7～8年もかかるので、メリクロンによる大量増殖を考え、山小屋のわきに建てた自分用の部屋の地下に培養室をつくり、選んだ優良個体の増殖を始めました。現在は丈夫で増殖率のよいロットまでにしぼり込んだところです。ビンから出したものを露地栽培していますが、ノネズミ、イノシシ、サルに荒らされることが多く、苦労しています。



今年開花したササユリ

ユリは好きな花なので、他にササユリも始めています。5年前に大島で採種したものをビンの中で播き、増殖性のよい10個体に絞り込んだところです。3年前に試作用にビンから出したものが、今年の8月に開花し、優良個体にしぼれるようになりました。ササユリに比べると非常に強健で増殖しやすいので、早くものになるような気がします。

ミニシクラメン

ミニシクラメンは、ガーデンシクラメンとして人気があり、生産量も多いものですが、育種をしていた国内の種苗会社が止めてしまったことで、フランスやオランダで開発された品種が多く作られています。

日本人の感性で選んだ新しいF₁品種の開発を目指し、親づくりを始めたのが10年前ですが、ここにきてようやく完成近くなり、F₁試作を始めたところです。丸弁で品のある花容、冬の室内の窓辺を飾るのに適した品種を目指しています。もちろん2倍体品種なので、耐寒性もあり、ガーデンシクラメンとしても使えます。

プリムラ・ポリアンサ

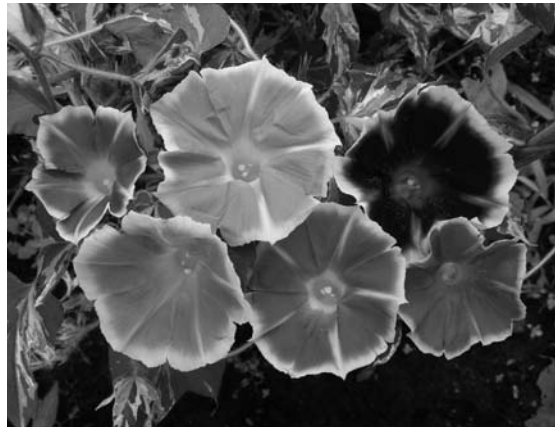
こちらもスタートから8年、親の揃いもよくなり、



試作を開始したミニシクラメン



試作段階のナデシコ



仕上げの段階に入ったアサガオ

完成も近くなりました。5月中旬に播いたものが、9月上旬には咲き出し、世界一開花の早いF1品種になると思っています。高冷地だから早く咲くのか、完成するまでには場所を変えた試作も十分行い、仕上げもってゆくつもりです。

ナデシコ

ナデシコも大好きな花の一つ、サカタのタネにいた時にも多くの品種の開発を手がけたものです。今、手がけているのは花保ちのよい4倍体の種子から育てる品種です。一重咲きの切花カーネーションを矮性化したものや、トコナツ系を材料に、昨年F1組み合わせをしたものが試作段階で、4か月余りも休みなく咲き続けたのを見て、自分でもびっくりしています。売るほど大量な種子を採るにはまだ数年かかると思いますが、高冷地と暖地を使い、年2世代をすすめられるので、頑張っ続けていくつもりです。

園芸を広めるために

茅ヶ崎試験場で、花の育種に取り組んでいたころは園芸ブームで、各地で園芸講習会が開かれました。話をするのは苦手でしたが、こと園芸に関することは別で、会社に依頼があると、よく講師として派遣されたものです。原稿の依頼も多く、新聞、雑誌にもよく記事を書きました。著書も20を越すほどになりました。今も年に数回は園芸教室の講師をつとめています。

5年ほど前から、東京都文京区の中学校の理科担当の先生たちが、実地の体験をしたいということで、毎年8月末の2日間、研修にみえます。今年は新しい人も含め6名が来場されました。中学でも園芸の授業があることを聞き、時代が大きく変わったことを感じて

います。ボランティアとして受けたことですが、人の役に立つことは気持ちのよいものです。

ハウスの一部にトマトをつくっていますが、水やりを控えめにしていること、昼夜の温度差が非常に大きいこともあり、甘味が強く、果肉の風味がよい自慢のトマトが実ります。先生たちに食べていただき、野菜づくりの話もしました。自家採種したノザワナの種子をおみやげに上げ、感謝されました。

現役時代の記念の品種

サカタのタネ在勤中に育成した品種で、最も印象に残っているのは何かという質問をよく受けますが、やはりそれは大きなヒット商品になったカンパニユラ・メジウム（フウリンソウ）の「チャンピオン」です。

フウリンソウは、昔から最も好きな花であり、自宅でも毎年種子を播いて育てていました。夏前に播いて翌年の6～7月に開花する典型的な二年草なので、夏越しに失敗することもあり、改良の必要性を感じていました。

育種を本格的に始めたのは1986年、長後農場長に赴任したころです。初めは誰もがづくりやすい秋播きで栽培できる品種をつくらうと育種をスタートさせました。花芽分化に必要な条件を変える生態型の育種です。過去にダイアンサスの二年草を一年草化した経験を生かし、7月播き、8月播き、9月播きと、毎年播種する時期を遅らせて、3年目には9月播きで咲くものを作り上げました。そして、F1品種として完成させたのが1990年、大阪で開かれたF.Expo90の年です。品種名も自ら決め、メイシリーズとなりました。カンパニユラのF1品種としては世界で初めてのものです。切り花



現役時代の記念の品種
カンパニュラ・メディウム 'チャンピオン'

スタイルのよいものに仕上げたので、営利切花用に広く利用され、今も作られています。

秋播き一年草化に成功し、F₁採種技術を確立したことをきっかけに、さらに大きな夢で春播き一年草化を目指し、9月播きから再び播種時期を遅くしてゆく方法で、2月播きで咲くものに固定させました。温室と電照設備を使い、年2世代を使い、再スタートから4年でチャンピオンシリーズを完成させることができました。茅ヶ崎試験場が掛川に移転した直後の1998年のフローロ・セレクトで、チャンピオン・ブルー、チャンピオン・ピンクがダブル受賞し、金メダルを獲得しました。

フローロ・セレクト（FS）はヨーロッパにある新品種の審査会で、AAS同様に世界的に権威のある審査会で、優良品種を世界的に紹介する大きな役割を持っています。

教会の鐘に似た花型をもつこの花は、キリスト教徒にとりわけ好まれることで、中南米の高地を利用したリレー栽培で、世界中に切花が供給されていると聞きます。

自分としては、サカタのタネ現役最後に手がけた品種ということで、とくに思い出深いものがあります。当時の金子社長から育種功労賞の表彰状と金一封をいただき、よい記念となりました。

カンパニュラの 'チャンピオン'、ヒビスカスの 'サウザンベル'、ダイアンサスの 'ミーティア'、コリウスの 'ハイウェイ'、パンタスの '湘南コメット' など、ドライブなどで遠出すると、思わぬ場所で手掛けた品種に出会うことがあります。多くの人たちに愛培され

る品種をつくれれば、人の役に立つことを改めて感じるものです。

育種を志す方々へ

最後に、これから花の品種改良を自分でもやってみようという人に、ヒントになればと、自分の考えたこと、やってきたことをまとめてみました。

どの種類の改良をするのかは、人により違うのは当然です。アマチュアの人には自分の好きな花、生産者育種を志す方は、当然、生産品目のうちから種類を選ばれると思います。育種材料になる品種をよく観察し、つくりたいと思う育種目標の理想品種をまず決めることが大切です。

扱う種類や品種が決まったら、育種方法の知識が必要です。各花についての参考書は少ないものです。とくに育種が進んでいない種類では、ほとんど記載したものがありません。このため、経験者、学識者のアドバイスを求めるのが一番です。後は、よく観察したり、実際に種子を採るために、交配を実験的に行うようにします。なお、最低必要な遺伝、育種園芸の基礎知識は、大学の教科書をよく読まれることをお勧めします。

花の育種には、美しいものを選ぶ目が必要です。花の色や形、茎葉とのバランスなども対象となるので、日ごろから美に対する感覚をきたえておくことも大切です。写真を撮ったり、スケッチをしたりすることも、センスをよくするのに役立ちます。

夢を持ち、計画したことを実行し、やり遂げるには、情熱と体力が必要です。日ごろから健康に気を配り、夢を実現させてください。